

(東京大学医学部、日本学術振興会特別研究員)

## 過去四五年間の一精神病院における 入院患者の死亡率および死因につ いて

小池 清廉

精神病院入院患者の死亡率が処遇内容によって左右されることは、とくに戦争末期と敗戦直後の栄養障害を主因とする死亡率の高さから明らかである。さらに、病院運営や職員体制に大きな変化がある場合に自殺が増えるという指摘がある。

一九四五年六月開設の京都府立洛南病院（現在三二八床）に入院した患者の入院中の死亡率および死因の過去四五年間の変遷を見ると、そこには医療および生活環境の水準ならびに時代状況が色濃く反映していることが理解されるので、資料に基づいて若干の考察を加えてみたい。

一九四五年度の在籍患者に対する死亡率は三八・五％（この年の都立松沢病院のそれは四〇・九％）に達した。一九四六年度は三一・五％、一九四七年度は二六・四％で、死因は敗戦直後のいちじるしく粗末な給食と医薬品不足および劣悪な居住環境によるものと考えられる。一九四八年度は九・八％、一九四九年度は一・三％、一九五〇年度は二・五％、一九五一年度は六・八％、一九五二年度は七・一％、一九五三年度（二・四％）以後低下し、近年は、一％程度である。

一九五二年度に二五名という多くの死亡者があるのは、ロボトミー手術の影響である。一九五〇年代後半より部分的な開放的処遇が進められ、薬物療法が普及するようになった。一九七〇年代後半からは全面的な開放的処遇が行われた。同時に長期入院患者の退院も促進され、自立生活を目指して近隣のアパートに入居退院する者が増えた。平均在院日数は年々減少し、入院患者の大半が三〜六カ月以内に退院しているが、他方では退院困難な長期入院患者の高齢化が進んでいる。一九八四年から一九八八年にかけて、病棟の全面改築による転棟に伴う移動および病棟の再編成

が行われた。

一九五〇年代中期以降の精神障害者の死亡については、死亡率よりも退院者を含めた死因、とりわけ自殺および事故死が検討すべき重要な課題である。これらは、処遇内容とその変化、障害者の生きがい、時代状況との関連で論じられるべきである。

（京都府立洛南病院）